

はととりんご

小川未明

青空文庫

二人の少年が、竹刀をこわきに抱えて、話しながら歩いてきました。

「新ちゃん、僕は、お小手がうまいのだぜ。」

「ふうん、僕は、お胴だよ。」

「お面は、なかなかはいらないね。」

「どうしても、背の高いものがとくさ。正ちゃん、いつか仕合してみない。」

新吉は、お友だちの顔を見て、につこりと笑いました。

「まだ、君と、やったことがないね。だが、新ちゃんを負かすと、かわいそうだからな。」

「だが、正ちゃんに負けるものか。」

新吉は、自信ありげに肩をそびやかして、前方をにらみました。

「僕は、新ちゃんに負けない。」

「僕も、正ちゃんに負けない。」

二人は、道の上で、竹刀を振りまわしながら、仕合のまねごとを始めたのです。

「お小手。」

「お面。」

「おや、あぶのうございますよ。」

ふいに、どこかのおばさんが声をかけました。おばさんは、道の端の方へ体をさけていました。

「新ちゃん、あぶないからよそうや。」と、正二がいました。

「ああ、よそう。」

二人は、往来で、こんなことをしてはよくないことに気がついて、ふたたびおとなしく、肩を並べて歩いていました。さっきのおばさんは、いきかけてから、ちよつと立ち止まって、振り向いて笑いました。

「正ちゃん、僕のはと、ねこにとられてしまった。」

「えつ、とられた。」

「どらねこがとつたのだよ。君、知らない。尾の長い三毛ねこだ。はとが遊びから帰って、箱のトラップへはいるのを見ていたのだね。後からついてはいって、二羽とも食べてしまったのさ。出ようとしても、トラップの口があかないだろう。ねこのやつ、箱の中でじつとして、目を細くして眠っていたのだよ。」

「悪いやつだね。それからどうした。」

正ちゃんしょうちゃんは、足を止めてあしと、新ちゃんしんちゃんの顔を見ましたかおみ。

「僕ぼく、どうしてやろうかと思つておも、おねえさんと呼んだよのさ。おねえさんも二階かいへ上あがつてきて、『悪いねわるこだから、ひどいめにあわせておやり。』というから、僕ぼく、太いふとステッキふを持つてきて、なぐろうと思つたおものさ。箱はこの中から引き出ひだそうとしても、お腹なかが大きおおくて、トラップくちの口くちから出でそうもないのだよ。」

新吉しんきちは、そのときのことを思い出おもして、息いきをはずせました。

「なぐつた。」

「だって、箱はこの中なかへはいつているのだろう。上うへからなぐれないし、僕ぼく、困こまつたのだよ。」

「ねこは、どうしていた。」

「悪いわるやつだね、目めを細ほそくして、知しらないふうをしているのさ。」

「あばれなかったの。はははは、だまそうと思つたおものだね。」と、正ちゃんしょうちゃんが笑わらいました。「じつとしているから、おねえさんに箱はこのふたをはずしてもらつて、僕ぼくが、なぐつてやろうとしたのだ。」

「なぐつた。」

新吉しんきちは、ねえさんが注意ちゅういしながら、ふたをはずしたのを思い出おもしました。そのとき、

ねこはあまえるようにして、体をねえさんにこすりつけたので、自分は、振り上げた手でどうしようかと、ちよつとためらった瞬間に、ねこが矢のように逃げ出したので、はつと思つて、すぐなぐつたが、ただ、はげしく、ステッキが地面を打っただけでありました。

「打ちそこねて、おいしいことをしたのさ。」

「だめだな、新ちゃんは、そんなの打てなくてどうするのだい。僕なら、きつと、たたき殺してやったのに。」

正二は、今度、仕合をしても、自分は、じゅうぶん勝てる、といわぬばかりの調子でありました。

「僕、あんなやさしいねこの姿を見なければ打てたのさ。」

日ごろ、犬やねこをかわいがる新吉は、まったく、そのとき、手もとがくるつたのであります。

「だめだなあ、敵を討つとき、かわいそうもなんにもないだろう。」と、正二がいました。正二のいったことは、たしかに、新吉を深く考えさせました。

「だが、ねこは、鳥をとるのを悪いと思つていないだろう。」

「君、はどのほうが、よっぽど可愛いそうだろう。」

「それは、そうだ。」

「みたまえ、箱の中はどんなだった、血だらけでなかった。」

「ああ、血がそこらについて、毛が散らばっていた。」

「それなのに、君は、はとの敵を討つのに、かわいそうだななんて思ったのか。」

正二は、新吉をなじりました。新吉は、じつと下を向いて歩いていました。そし

て、つくづくと自分の勇気がなかったのを感じ、ねこをなぐらなかつたのを後悔しました。

交叉点のところへかかると、まだ、青赤の信号燈がまにあわぬとみえて、ばたんば
たんと、ゴーストップの機械をまわして、見張りの巡査がピリッピリッと、そのたびに
笛を鳴らしていました。

ばたんと赤が出ると、一方からくる車がみんな止まって、いままで、じつとしていた車
が、流れるように続きました。また、ばたんと機械がまわって、ピリッピリッと鳴ると、
ゴウツと走ってきた車が急に止まって、止まっていた車が走り出すのです。台の上に立つ
て、ピリッピリッと笛を鳴らすおまわりさんは、あるときは、やせて背の高い人のことも

あれば、ときには、太^{ふと}つて腹^{はら}をつき出した赤^{あか}ら顔^{がお}の人のこともありました。

今日^{きょう}は、その太^{ふと}つたおまわりさんで、胸^{むね}を張^はつて、元^{げん}氣よく合^あ図^ずをしていました。

ピリッピリッと笛^{ふえ}が鳴^なりました。このときと思^{おも}つて、二人^{ふたり}があちらへ道^{みち}を横^{よこ}切^ぎつていきかかると、

「おい、君^{きみ}。」と、おまわりさんは、後^{うし}ろから、二人^{ふたり}を呼^よび止^とめました。新^{しん}吉^{きち}も正^{しょう}二^じも、びつくりして、おまわりさんの方^{ほう}を見^み返^{かえ}りました。

「ちよつと、きたまえ。」と、おまわりさんは、大^{おお}きな声^{こえ}でいいました。

あちらの歩^ほ道^{どう}を歩^{ある}いている人^{ひと}たちまでが立^たち止^どまって、なんだろうと、こちらを見^みたのです。

「僕^{ぼく}たちは、なにをしかられるようなことをしたろうか。」

二人^{ふたり}は、顔^{かお}を見^み合^あつたが、おまわりさんが手^てを上げ^あて招^{まね}くので、その前^{まえ}へいきしました。

その間^{あいだ}も、おまわりさんは休^{やす}まずに、ばたんばたんと機^き械^{かい}をまわしながら、ピリッピリッと笛^{ふえ}を鳴^なりました。そして、一方^{ほう}からくる車^{くるま}は、それによつて、ゴウツと走^{はし}り出^だし、一方^{ほう}からくる車^{くるま}は、それによつて、ぴたつと止^とまりました。

おまわりさんは、いつもここを通^{とお}る二人^{ふたり}の顔^{かお}を知^しっているとみえて、

「いま帰るのか、おそいな。」といいました。なるほど、短い冬の太陽は、もう西にかたむきかけていました。

「撃剣のおけいこをしてきたのです。」と、正二が答えました。

「君、それで、ひとつ、この小僧を打ってくれ。」と、おまわりさんは、わきを振り向きしました。二人は驚いて、そちらを見ると、かごを自転車に乗せた小僧さんが、じつとして立っていました。（きつと、合図を見ないで、走り抜けようとしたのだ。）と思いました。

「ひとつ、うんと打ってくれ。」と、おまわりさんは、今度、新吉の方に向き直っていました。

「僕、いやです。」と、新吉は答えました。

「許しておやりよ。」と、正二が、おまわりさんの顔を見上げていったのです。

「いや、一つ打てば許してやる。それでなければ、一時間も立たせておく。」

これを聞くと、正二は、一時間も立たされるのは、かえって小僧さんを苦しめることだから、（打とうかな。）と考えました。

彼は、竹刀を持ち直して、小僧さんの方を見たのでした。早くもそれを知った新吉は、

「えいつ。」といって、正二しょうじの顔かおを自分じぶんの竹刀しなたいで、一つ軽くたたいて、あちらへかけ出だしました。

「やったな。」と、正二しょうじは頭あたまをおさえて、すぐに新吉しんきちの後あとを追いかけてました。おまわりさんは、大きな腹はらを抱かかえるようにして、

「わつ、ははは。」と笑わらいました。止とまった車くるまから見みている人ひとたちまで、こちらを見みて笑わらいました。が、ピリッピリッ、ぎい、ばたんばたんきかいと機械きかいがまわると、もう一瞬間しゆんかん前のことわすは忘れて、みんな走り出はししました。二人ふたりの少年しょうねんの姿すがたは、見えなくなつてしまつたのでした。そのつぎのピリッピリッを鳴ならし、機械きかいをまわすと、巡査じゆんさは、

「これから氣きをつけろ。」と、小僧こぞうを許ゆるしてやりました。小僧こぞうは、幾度いくども頭あたまを下さげて、ほかの車くるまといつしよに走り去はしりました。

町まちからはなれた野原のはらの草くさは、毎夜まいよふ降ふる霜しものために、黄色きいろく枯かれていました。新吉しんきちは、一人ひとり、道みちの上うへで、夕焼ゆうやけのうすれた西にしの空そらをのぞんで、雪ゆきのきた、遠くとおの山やまのけしきをながめていました。すきとおるような空そらの色いろは、ちようど冷たいガラスのように、無限むげんにひろがっています。そして、刻々こくこくと紫むらさき色いろに山やまの姿すがたが變かわつていくのでありました。

彼かれは、じつと目めをこらして、うす紅べに色いろの空そらから、二羽わのはとが、いまにもぽつんと黒くろ

い点てんのようにあらわれて、こちらへかけてきて、だんだん大きくおおなるような氣きがしたので
す。

けれど、いつまでたつても、それはむなしいのぞみであつて、なつかしい影かげは、あらわれ
ませんでした。

「正しょうちゃんのいったように、あのとき、ねこをひどいめにあわせてやるのだつたな。」
帰かえらぬことを思おもつていると、チリチリチンと鈴すずの音おとがして、八百屋やの小僧こぞうさんが、やさ
いを乗のせて、自じてん転車しゃを走はしらせてきました。そして、新吉しんきちの前まえを過すぎるときに、ふと小
僧ぞうさんは、こちらを向むいて、かごの中なかから、一つ紅あかいりんごを取とり出だして、新吉しんきちの立たつ
ている足あしもとの草くさの上うへへ投なげていきました。

はつと思おもつて、新吉しんきちは見送みおくると、小僧こぞうさんは振ふり返かえりながら、手てを上げあげてしっけいを
しました。

「あつ、さつきの小僧こぞうさんだ。小僧こぞうさん。」
すでに自じてん転車しゃは遠とおくなつて、こちらを向むく顔かおだけが、白しろく見みえました。新吉しんきちは、り
んごを拾ひろい上げあげると、につこり笑わらつて、その冷つめたい紅あかいくだものを自じぶん分のほおに押おしあて
て、あくまで、北国きたぐにの畠はたけに生うまれた、高たかいかおりをかごうとしたのであります。

青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 12」講談社

1977（昭和52）年10月10日第1刷発行

1982（昭和57）年9月10日第5刷発行

底本の親本：「鳩とりんご」新潮社

1940（昭和15）年12月

初出：「日本の子供」

1940（昭和15）年1月

※初出時の表題は「鳩と林檎」です。

入力：特定非営利活動法人はるかぜ

校正：酒井裕二

2017年9月24日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られ

ました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

はととりんご

小川未明

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>